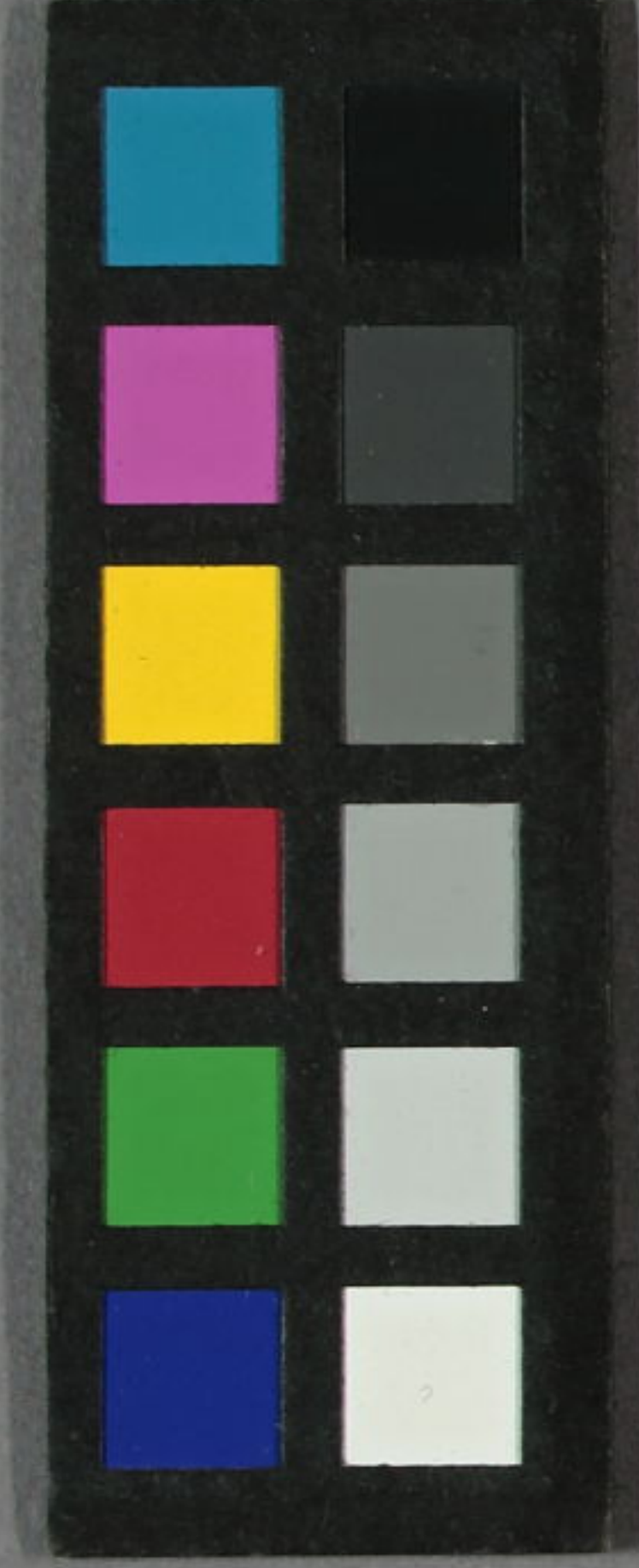


俳諧一葉集

二



照のひくけをたぐるむの月
瓜はくゆくや一曳の山
玉すけくものともさるる島ゆ花
ゆくまのゆきり住より一の松
片海一は仕敷を新一のまきまて
友よふとりののこころあつある
き津よのまきへ白紙の標へ毛
森のふ風は木葉六そく
古昔原ふたれく道へゆきき
法はききんむごりあひのぬ
忘の秋にいたくぬきききよ
吉祥天女とらねかき月の

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

あつくは強強うるふかつ
松のゆき一はゆきく耳たふ
大星の代名を花よりくろひき
かすみよりもろき天竺のまぬ
とちのまき女一文の標をとく
風進退をくり割る井庵
臨の路をより京通ひきれ景を
うみありのを新うりやの中
地へゆく石のなまきらひてし
末の松山著候はあ
子賀の浦まねるるけり場の隅
を流きひてくまきり

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

たけは... 山... 谷... 法... 花... 上野...
青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

陽... 山... 人... 山...
青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

小松やさうしびハ引きよハ
其石よりいふ女のよの夜
うらひ強ハニ階ハ切きりれと
かこま揚屋き砂み松
とふふとて去物の橋つとて
能因法師若者のとて
思つけさる色好玉やや染つて
つとてまらぬこゝろ眼あつて
飢饉とて弱くともぬ秋の
多くハ傍をみぬの上
一葉つ柳の葉やさけぬ
らけとてたかきとてけし

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

お友の身ハいさやちのこゝろ
対面陣一玉おのり一淨瑠璃
おもろねとてさるこゝろ山端
松吹風やれそふとてあ
果らるるまみの二布の下紅
巻く一秋を青葉あつと
月すくく星辰のさる中
河内のあくらふ飛石
四身まとの屋の里と海と
浪干し芦垣伝つ
叶を花入江の石中
やとて一流杉子一葉

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

名
 けりさくハ魔法ト書と久入尺上
 七リシク入あめり
 集瑞三井の古寺汲所けり
 最ききく終しきめこち概
 階はら目くハ目より
 湯之は巻き玉合り
 既子神み一実りくをぬひ
 白蟻 殿ハ沙年より終て
 つくしと向うたすく後山
 之け入新屋ハ小蛇の洞を
 忍ふ根ハ狐のあましまり子も
 め子く子揚し江川あまのあ
 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

唐人とよの月くくく丸や
 古文古言書のつり 秋
 酒のあなけ起で白雪飛
 了物たかーや人のくさや
 新のよまに杖の大木大間屋
 流をいりえく多ありよりある
 秤より日本の多るやうけぬん
 所く能のまをくつめりり
 花子くく之禁の里ハ十園子
 り坂くゆまハ峰のさくく
 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

同年春

信章

梅の風 能話あきさうんあ
 こらとくつ行々けけのき
 さわ入す雲のきぬの袖ええ了
 けんや〜〜ぬ心のけけ
 き〜〜に中ける方か〜〜ます
 う〜〜地ぬきけさけさきひき
 海え〜〜るありの常〜〜月す〜〜
 趣向〜〜く〜〜船のあき方
 い〜〜く過る〜〜らえ〜〜る秋の風
 雲〜〜く用し〜〜る月の羽衣
 う〜〜つ樹〜〜く〜〜ぬ山の影ひかて
 青嵐〜〜く〜〜ひ〜〜よぎ〜〜く〜〜く

孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝

松故の木のたのた 孝とあれ
 孝 擔 桶 きり〜〜村雨のぬ
 夕陽〜〜生ひ〜〜ぬる孝のき
 孝子のす〜〜る山の端か〜〜れ
 富空のむ〜〜るの雲〜〜る孝
 桐壺〜〜る木〜〜る孝ら 袖舞
 瑠のち〜〜るの〜〜る孝みやふ
 行五六外〜〜にけ〜〜る 月
 古里の〜〜るの〜〜る孝あき
 志賀山のき〜〜るふ〜〜る孝
 孝のき〜〜るや二〜〜るの〜〜る孝
 孝の〜〜る孝あ〜〜る孝の末

孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝 孝

河の段子池のこころを石ひら
玉子のあやうらこころを洗
傳ゆら官のよきあんなかまそ
上 碧のうらまをふか敷 抄
付とくけあといふ子の居か
親類をかひのこりれこころや
寺中よ大なるゆれハ町人あり
柳ハみとらうけハ取 緒
古帳う校点を引 鈔書
火跡をとくこころ 物まのこ
こころのゆみうこころ 浪の月
河幸子のゆけとく 秋をこころ

、 幸 幸 幸 幸 幸 幸 幸 幸 幸 幸

くそ野きけハそまのこころの
地獄のゆめきこころのゆめ
飛巻まのこころのゆめ
無子書ハお前の長そ
約瓶とく 家やまのこころ
飛ハたらまら下女子ゆり
志おのゆめは折くのゆ使
白むくそこころ 粟五十石
ゆめと法とあつこころのゆ
ゆめハゆめとあつこころのゆ
床ハゆめとあつこころのゆ
虎の毛こころとあつこころ

、 幸 幸 幸 幸 幸 幸 幸 幸 幸 幸

雲は増ハて海もさくわく
とくく夫二解まふく一の先
軍ハ初進子勝もをまみ合
そ契何百きさくわくの老
寺 寺 寺

同書

松青

河くわくもまきさのさくは縁計
居合ぬやゆわの玉やぬきん
柳老名字ハ丸丸 藤 原
あ庭の法用とゆわハ池のさ
海志さこま一まおすハ謝
信章 信德 青 章 德

碧油のほろけまき月まみ
更く志は(小夜め 花
み耳やよまゆわ一き萩の
新波の芦ハ伊あつたまら
屋一きくゆまきさく一
かきも小おやゆわくは
物徳よけくわ家まき
干籠四五散くれ一きの毛を
寺のほろけまきさく一
み一うふくまきさく一
藤野のまきさく一
まきり積つて陸橋の功徳
寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

名代の古名置しと呼ぶもの
 雙舟の浦はうらぶらぶと履持
 不そ尾の跡の阿戸の跡舟
 お八海入りを洗ふうしる疵
 松の根まらう石の強と
 清の連と和心女の親と
 尾の控の控うし侍の月
 赤の志を嵐の心よし阿の秋
 涙のまらうと雲きうの心
 衣の装束の海うらぶらぶの風
 白ひをうらぶらぶの白龍

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

名
 跡の古一巻二百巻と称す
 所は海ハさひふめつハ島久山
 和の今のた多引定て其よりし
 出雲と来る海邊のふぬすみ
 舟縁の橋の上より着きたりし
 初會世の可なりなる可
 祖父祖母とやおとわ若と
 被をいしと子龍と人どく
 米徳のしと跡う肩子可
 木管の夕風と好三郎
 岸跡天と志行と休ふと花柳
 かしやわをさとと川舟

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

強田屋進退あやをたのまれて
 二人の若女浪人小姓
 作事手ちきれうもいひを足
 法しけわつしけ残さうの母衣
 心ちあめさのほくまをハ
 浪ちき入る大巻の洞
 首隠津地獄の底くさうはた
 珍杖解のあひを砕くる
 酒の月ほまおのし振る
 障の内俊おまの
 肩を取袖ふさうする花^二毛
 中風もくハ世帯一持さう

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

瑞の尻入江の以り事をけ
 のり庵のうしと鴨の写しお
 山うけの精進あまねのあ
 三十三寺秋取てし 尻
 子帳や後成仇のちうけ
 宇量法外小僧新書意
 いろは顔枯之山とあうし
 ちを増福す叶白障 秋
 新しうく長月法の季根あ
 障のちおねしうし 浴一 扱
 竹鼻やくまき世とくし 峰味や
 まういふは母縁のめけし

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

侍を一人し(ワケ)とて鬼に
 急鬼と名く染ハシマ
 正之うまそれとものかさ
 うに花きつたともか
 赤ハ地東叡山の太脚しき
 花めさうに河中央をもふ
 青極の象ゆかししや心
 赤是子かむの影うろた
 赤はしよとを明くふか
 先きうの駒子而の又え
 恋の去きやれ陸しそあさけ
 伊集原使風の玉
 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

心中の山林竹木揃き
 末寺の宿屋菩提和の月
 三才の和尚のうら秋あけを
 疎院はうさり清やすか
 堂のいり理解の店の風
 ここの心のようか暖屋の
 赤の網あかりおぼし人あけ
 首つけの思ひ怪くす
 うき中ハに巻やうろ
 赤(し)の赤子宿汗うろ
 志あハ赤大花名の赤おま
 鞠了借正床入の山
 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

若宮のついでに筑紫の八幡宮を
 かついですのや右近きついで
 その月橋の精舎のついでに
 すも山も志保の成佛
^三又性の眼の光り陽の輝
 撫穂の光り因果すもついで
 志保のついでに十景目とこ
 大八や志保のついでに
 日産をめぐりついでに
 山花の柿 輝の尾のついで
 青の雪の目白羽のついで

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

言月等より本宮のついでに
 ようのついでに谷津のついで
 山花のついでに輝のついで
 山花のついでに輝のついで
 白のついでに輝のついで
^名 輝のついでに輝のついで
 延平のついでに輝のついで
 山花のついでに輝のついで
 山花のついでに輝のついで
 山花のついでに輝のついで
 山花のついでに輝のついで
 山花のついでに輝のついで
 山花のついでに輝のついで

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

邯鄲の里の野花は月明く
 よくしゆゆと金糸を流る
 子句より十萬倍も鼻の先
 糸おろしつゝたのち武骨落
 音楽のふる三味線あいの心
 四折さハく牛のあぢ
 姉妹の佛伽は丘尼のり下も
 浮かそやそとの佛もそま
 けつぎ一黄金の膚ころやう
 小娘みよの草袋あ
 旅杖油くきやきくゆん
 弱く飯ゆらきく焼く

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

夕のゆきうはくし汁のうき情
 巻理の若花のくしをた
 空や花白あてく後弟のう
 店ちく帰く羽筆のう

寺 寺 寺 寺

同年春

物のりよと情や古郷のいのほ
 作くまをえ百野里の喜
 峰もをえのり子難多知
 子人力のあ風くく
 態つふいあくたのくく
 糸右を笑ふ神くく

寺 寺 寺 寺 寺 寺

信徳

柳音

信章

寺

寺

寺

雲の終幕のらきりつろひさ
 尾花の初り鏡かきり可
 吹らん いろいろ風のまきり
 夫ハ山依海士おようひき
 一念の解と毒く七まとい
 かしらハ鬼の穴神いこく
 残ふのり侍おふようよう
 神のいごきまをこま 聖めり
 鏡をこねのちや切つらん
 伝石をくれのちんを引んぬ
 骨うつき思ひまよひおとし
 之やうりまをたてのちか

海 寺 海 寺 海 寺 海 寺 海 寺 海 寺 海 寺

夕日暮少風をよほす水の月
 木影さくさきの紅葉さくく
 花を風吹きらんを吹き
 袖うつろき 雲をれゆ
 二 了侍乃借金子 二 月 中 旬
 勤 勤 勤 勤 勤 勤 勤 勤 勤 勤
 釋迦殿に法式儀をまけん
 八万能取神古多解まき
 張張や十方世界のりはる
 凡いのらハ森去のちか
 いのちの地獄を志の秋
 ころはくぬやん杖をゆく月

海 寺 海 寺 海 寺 海 寺 海 寺 海 寺 海 寺 海 寺

約とめくら旅おしとくまのる
 東坡のホのホのホの一
 共思く石すりの文よふい
 酸子の海木秋魚のさうさ
 去用志れ山を甜火の青行し
 谷よりたけえく養研めと
 三 冬風若き柑樹の投擲の
 吹矢をとおく思ふ海舟内
 秋の名瑞のまふなをやぬえ
 まの虫籠むし曹たふとく
 悉くもを達てきしまのれ
 氏業平の情人やあや

冬 春 秋 冬 春 秋 冬 春 秋 冬 春 秋 冬 春 秋

本城色は秋名雙子と夏
 ひんやの秋は社尺のさる
 物やうしき方射のまゝに
 松江の海はあ店の 嘯
 めく桶の籠のまゝをつみけ
 平月白うらむくの思 鯛
 花よりん秋の初は瑞のもの
 父大信のまつたあや 春
 三 子花々や十二のくろくさ
 笈の中より春の山は月
 西男麻の妻をくれ丸の早見
 上儀のお鶴むしし秋

冬 春 秋 冬 春 秋 冬 春 秋 冬 春 秋 冬 春 秋

関和よの拂子家より字は家
火付の巻とて花ゆくりん
本三位依子も張るるくま
真の巻や路おこしあ
かこく可子難波の梅は兄弟
夢より夢 卯吉の巻
そ花のとくし胸の氷もあそめ
温能きくつあす橋のら水
物事の子中の言は浮子引く
急めやらんくし移り来り
買うるも花ぬ浮き付く
つ川の大ききつらの佛一坐

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

物は家の三子振伊那きん五郎振の
花獄やふりやき居破りや
小振めふ奴の枝はたむき
滅金めりぬ振つ修羅王
まは振木子修りくし神
岩戸のくしけし縁の元世
路の文字一分も定り
控めかきくし古巻の月
秋やまきくし二代目の地巻も
うらの巻帯 師 五
花の枝縁舞言舞きくし取
月 花は蔵人巻 甘草

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

於四友亭無行

似春

次広そ秋志堂を良儀見でま是ハ
 初の () の海さーまく月 四友
 沖の石玉庭、神の香をれて 桃青
 足きくれてや石の写しむ
 山おろりー小峰のうけをさると
 走くもくうらふまふまのぬい
 甜海食、麻子カーマ、様さく
 禁をさふれつらめゆく
 ぬきく人く三三のまやまらん
 火付けの所中くくくくくく
 子雑の風公儀くくくくくく

陽高先うら白装の 外
 多次中歌くくくくくく
 洲崎の松れくくくく
 了くくくくくくくくくく
 渡の 多き 撒りくくく
 又やまの海屋門あれ物中
 青の初四百八十目 米
 芥中山くくくくくく
 浪くくくくくくくくく
 花のくくくくくくくく
 二 喜 柳くくくくくく
 血のくくくくくくくく

胸のつきりさうりも
すわりのしりぬりさうりも
おわりのしりぬりさうりも
おわりのしりぬりさうりも
おわりのしりぬりさうりも
おわりのしりぬりさうりも
おわりのしりぬりさうりも
おわりのしりぬりさうりも
おわりのしりぬりさうりも
おわりのしりぬりさうりも

新代の歳まらるる
ゆめれは羨系との勢
風と屋のゆめれ
お使手はゆめれの勢
二宮様とあくと
命の月やうとや
おわりのしりぬり
冷食を思ひぬり
尾生滅活生
おわりのしりぬり

三十四

冥ふ千しやうふそハ残燭て
 口情の花は夢くやめくた即
 ち〜まて〜と野をゆ〜と山吹
 三ひまふ志不吐〜とや情堪
 安〜と〜と〜と〜と〜と
 お情子ゆ〜と〜と〜と
 根多〜と〜と〜と〜と
 長敷の葉ふ〜と〜と〜と
 葉ら〜と〜と〜と〜と
 幾月の少ね〜と〜と〜と
 と〜と〜と〜と〜と〜と
 残情ふゆき〜と〜と〜と〜と

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

心より子情を扱〜と〜と
 慈名甜の族〜と〜と
 ち〜と〜と〜と〜と〜と
 ち〜と〜と〜と〜と〜と
 三市をよ〜と〜と〜と
 三珠〜と〜と〜と〜と
 山〜と〜と〜と〜と
 浮〜と〜と〜と〜と
 夕〜と〜と〜と〜と
 夕〜と〜と〜と〜と
 夕〜と〜と〜と〜と
 夕〜と〜と〜と〜と
 夕〜と〜と〜と〜と
 夕〜と〜と〜と〜と
 夕〜と〜と〜と〜と
 夕〜と〜と〜と〜と
 夕〜と〜と〜と〜と

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

衣を肩すうくぬけ合
 酒手乞白雪帯を海をこり
 秋風起てわらよま棒
 舟遠をも舟のささくハ忽そ
 尾を引すうて森のふそ
 御神鏡別花ハあま
 つしとてつりまきそ
 持けしニッの玉子か
 うらたさく度ふ玉のか
 空降す伊との島松と
 ちみ石ぬら中ハ十六
 山唄り歌すちのひき
 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

言を並み所といてやは
 物あを都の西子ま
 ちの帰れ古を流るる
 右園の二粒一足や
 言を鼻おしてと疎り
 秋の二輪是火入をさ
 格を子ゆ袖子力も
 思ひぬれ世方のあ
 言峰眼をくくく
 思ひぬれ世方のあ
 近利の法を裳ぬけ
 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

嶺嘆 瓊枅 吐息 つくくむ
手争の音 業 敗手 所くま
おふー 枅子 友の丸 此く
より金の花 郭 去のう 此
山くま 子みの 友くま をお
喜
喜
喜
喜

四季秋

元 既をハ 流れハ 元 終ハ 此 戸の 秋
桂の 帆く たら 十 分の 月
さうら 大う 子みを 変す 有る 心く
山ハ 強き 子 友くま 此く
忠厚 是く 家子 陽く 人 友
喜
似 者
喜

柳青

くけく ぶく しく け 備 大 將
何れも 御 漱 魚 録 郭のく
おハく けく 峰 言く 心
陰 居く 此 郭 此 友 家く 心
お 鈴 此 心 此 ね めく 心 菊 此
春 此 子 亦 拂 此 此 子 代 此 秋
み の 此 此 此 此 此 此 此 此
木 被 此 此 此 此 此 此 此 此
灣 此 此 此 此 此 此 此 此
此 此 此 此 此 此 此 此
揚 此 此 此 此 此 此 此 此

本若のしよふ思ふそめしりし家
 修善すゝふれの待やらしきあ
 宿ものありしをききまらす
 花のまをて張山やまよりみ修く
 宗盛のこころよりふふのま
 白砂の旗よりまよりく修くを
 み下を軒端よりやめめくは
 寺のゆり、定家あけ修くま
 骨より心存ゆりゆめめ 月
 八百寺修修の光あ文く
 狸のら川ちやしめ本寺の秋
 狼や香けあやあああ
 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

後 尋く 信正、 谷
 一室峰岩手駒く 左刀の伝
 争 之れく波の激き情
 々々やす切果く飛あら
 溪の仙をそとあ山竹の一村
 路を扱き駒く 經年よの
 舟の行、 駒の火より修あく
 立さらくや長持神一やれ
 ひとまへ人きり物やあ
 路の敷ま盛修くも修あて
 研哉 勝く 又ちや 可川
 おもくくかきし静ぬのをま
 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

親仁は説法ゆゑハまきく修め
系小紋の羽折ハ星子海の
はらきくれ縮の夕神の字入
管絃を木幡の舞やまきく
管絃ハ折れとも毛兎も折ハ
縮の骨いしくも折ハ里の月
又まきく造ハ丸山の色
片基盤初の本系ちまきく
まきくみの下まきく縮ハまきく
三まきくやまきく掛付まきく内
級引御守まきく始ハまきく
修めまきくまきくまきく小原系

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

修く 兵 輪 大 船
まきくおの先まきくけんまきくおの
まきくハまきく本おまきくおの
困果ハ笑稱の無まきくまきく
善 男 吾 吾 役まきく
又まきく孔子字ハ太二郎
おまきくおのハおまきくおの
不心中まきくおのまきくおの
君ハ作 笛 糸 糸 糸 糸
まきくおのハおまきくおの
秋まきく通まきくおの
寂滅の貝まきくおの

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

石之川ぬきさる山本の
 大地を穿つてのく龍やの
 長十丈は鮪ありりりり
 加戸は子の橋板をく尺さ
 魚外漁り多き包丁
 ぬれ稼や少くぬれハ子
 新稼は伊勢の山は子兄
 河内ハ車おとと此秋風
 さくれては飯匙^{ヒカイ}と厚き
 魚を溜りしと胸くのす
 行きのさす姿息花もさし

喜 喜

名 喜

新是は怪象をすうす物
 代ハ車沙車めつりり
 何とすの係の与之中大
 たりけ狂ひたりし中軍
 口舌うそ其後斬る係り
 るるものこわたり赤心
 是月おつて之やまの
 赤子別玉粒つたのむ
 赤子物も赤子赤子
 蹴部 枕あり奉仕 旧
 陣一ツ 赤民それも

けんどうい草まや山の端は
 小舟のちり溜の月と月
 展平沈む瓢箪の
 瘴風と山を流すかられ
 かろくは天下おろろ
 けはあゆふ人形波風も
 海士の聲しハ新のこくに
 ぬちの樂苦火下ゆてねん
 八尋豆腐あこもあ
 面影はねる——大根をえ
 あろく降子すまむねの月

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

同季秋

のまれくち初の大春江戸の秋
 細のかくも子令は月
 菊やとのあきくき原野
 漁舟の燈ハ灯浪こす
 碓の部といきくはねの
 与佐りやさけさ仙境入
 とやうさもやの上まし
 いつとも神喜れし
 伊所こもそお姿ハ
 所——この行を凌ぎた
 ちのてはきづの夢はるい

似春 柳青 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

春燈

舞かろしきひひれきりて
お作しし心能りき出の障のき
被のこまきそきき 桂は
小きもほもき出たわうしと思
鬼くくくすも生補りて
天も花も毒の酸粒力なり
飯のこころはきりてゆ
ありきき猫ハ部て時き
廻つ心のいりきりてき
初の年しきききききき
今輪障りてき山のみき
畏河門北障のきききき

おそはき首のききき月
蒼 舌をハツキやきき
古物右直り歌をきき
古川のききききき
先きききききき
日待りきききき
やきききききき
きききききき
肉ききききき
松ハすききき
きききききき

小河、果は女方とも
恙祈詔ふきんあつてもあつた
昔子あしのせてわ^た海^{うみ}や^りい
あ、船^{ふね}あ^らき^きし^き中^{なかつ}を^を思^{おも}ふ^ふ
秋の夜半、寝了きひき
針^{はり}立^たれ^れ衣^い履^り停^とむ^む尺^{せき}寸^{すん}く^くれ^れ
秋^{あき}と^とし^しぬ^ぬ籠^{かご}ハ^ハ湯^ゆ山^{やま}此^{こゝ}月^{つき}
河^か、^と楊^{やう}枝^しき^きの^の水^{みづ}峰^{みね}の^の音^ね糸^{いと}
四^よ玉^{たま}又^{また}海^{うみ}と^と春^{はる}一^{いつ}く^くも^もん
二^に又^{また}の^のけ^け走^はい^いあ^あら^らく^くに^にの^のま^まあ^あら^らく^く
塔^たく^くう^う、^と洗^{せん}子^し仲^{なかつ}津^つき^きう^う波^{なみ}
竹^{たけ}戸^と柳^{やなぎ}阿^あ波^なの^の心^{こゝろ}門^{かど}や^やあ^あら^らん
春 澄 春 春 澄 春 春 澄 春 春 澄 春 春

漏^もき^きう^うく^くし^しま^まけ^け一^{いつ}塚^{つか}の^の泉^{いづみ}
山^{やま}ら^らく^くの^のさ^さの^の根^ねお^おろ^ろ一^{いつ}た^たの^の雪^{ゆき}
耳^{みみ}せ^せく^くか^かく^くす^す岸^{かき}の^の春^{はる}柳^{やなぎ}
春 澄

桃青

同
冷^{ひや}や^や一^{いつ}た^たの^のさ^さの^の根^ねお^おろ^ろ一^{いつ}た^たの^の雪^{ゆき}
虫^{むし}の^の居^いる^る波^{なみ}の^のあ^あら^ら野^の
川^{かわ}渡^{わたり}の^の杭^{かき}木^きや^や花^{はな}の^のつ^つら^らの^のむ^む
子^こ年^{ねん}手^てあ^ある^る妻^{つま}み^みと^とし^し
又^{また}と^とし^しの^のあ^あら^らく^くの^のさ^さの^の根^ねの^の月^{つき}
音^ねく^く吹^ふか^かす^す山^{やま}の^の秋^{あき}風^{かぜ}
子^こす^すの^のあ^あら^らく^くの^のさ^さの^の根^ねの^の月^{つき}
春 澄 春 春 澄 春 春 澄 春 春 澄 春 春

勢の床より走丸のるし
産むす浅みらるし
ききしものもあつたのうし
休は暇のよめり対ふもあそび
古葉よりえりし仲人のあそび

同

桃青

宮や内下の子金の通つ町
まより敷きしぬ看板のあそび
新葉もや三島かられり
芦の葉よりゆりし味する浪
甚や柳より小舟よる

二男より名と市そのの対
糸ものも先悦流るるれ
糸草喻ふくさるる
玄論の法地は叙も幾
あそびとてつりし緑青の山
隈の嶺より内なる
秋を中布此居り山風
枝の勢もあそびまら
精を所けれ三位入
かきとあそびあそび
又原より陸子よりあそび
あそびあそびあそび

桃青
ト尺
紀子
二葉子
桃青
ト尺
紀子
二葉子
桃青

託田のたぐは抄書とくくくく
 毛體も佛門の同くを錦あり
 そとや霞裳の深草す
 破れ裳の衣のたぐは法衣とくよ
 岸のたぐは羽の郭とく
 押入や袋のたぐは此袋階子
 織子のたぐは物衣のたぐは森
 能くたぐはまを妙のたぐは
 庭様のたぐはくゆくたぐは
 扇のたぐはうねのたぐはのたぐは
 姐板のたぐは月摺のたぐは不二
 昔の秋三子のたぐは人のたぐは拂物
 二葉子
 紀子
 下尺
 二葉子
 紀子
 下尺
 二葉子
 紀子
 下尺

釋かものたぐはくをたぐはのたぐは
 叔母のたぐは精冷のたぐはのたぐは
 大坂のたぐは川もたぐはのたぐは
 那智のたぐは火入のたぐはのたぐは
 鬼一口のたぐは物たぐはをたぐは
 岩のたぐはたぐは方とくくく
 是れたぐはをたぐはのたぐは代のたぐは
 二葉子
 紀子
 下尺
 二葉子
 紀子
 下尺

同七毛未冬
 荒巖味喰くくく岸のたぐは
 信風のたぐは基のたぐはたぐは
 千春
 信徳

破多終衣おもく可けつ
嵐とくら終も力の入るや
残智けしきハ勢解し
可強しやい女、枕の初尾む
百少知くさくたさ少れの種
仇一毒をかこの釋の流しハ
又男ら必かくちかくわ
古の羽折子志そし
つくくと泥命のやを箱を至
弦ひくとあぬさへきうのあ
強かへもれくやうの月

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

や折子着る原の面
料理人歩をまき岩の浪
木を原の扇仲のまき
^二佐吉のゆ子、尺、ぬ小刀紙
以海の娘松、繩ものまきとく
まきぐくに襦袢と袖、緩つ
枕あくくし、細めけゆ果
論とつす天のぼろし中、強
経の白あ子、踏まきし
滑川ひひり、艾子火きし
都宮よき、雨、帚の風
いと、きん、利久、山、法、師

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

秋は糸の三節一々一々の月
 虫のあつてつくと直つて雨は
 いさこ長一々石棚の
 とんぶれのとけしをいさこ
 園生のまはれまはす四竹
 引くやうに食の味背を
 ころころとつてころのきぬ
 思ひ川増れ七りの
 南草や稲花の流つきま

春 春 春 春 春 春 春

同季春
夢想

きけく二内中旬初
 天下のあけあけ
 雨もあつたあつたあつた
 志らふ嵐子雲そ
 中下りるあつたあつた
 谷の戸はあつたあつた
 上く吉くあつたあつた
 五里の羽と雲あつた

秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋

枕青 松風 世風 流 越代 秋風 而已 執筆

同
 山を志す
 樞の
 秋風

枕青

手の柄をの度袖有るまで
 とぬのこころ風のみくは
 阿の針を餅のちる雪の虫
 猿ををたはく崎のねを
 知るのけ岩根の床はくは風
 ありの湯をさすすまのくは
 葉中さくお袖をく侍ふ風こそ
 何と軒子さきのひけり
 五十点ある中をもはくは
 印とぬくやをもはくは
 随流をくぬくはくは
 青羽阿くはくはくは

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

小初時雨思をくはくは
 とくはくはくはくは
 風自ふ小使をくはくは
 天吹折るはくはくは
 石をくはくはくはくは
 乃くはくはくはくは
 高の雪色の粉をくはくは
 雲もくはくはくはくは
 とき板は破るはくはくは
 嵐の波をくはくはくは
 宋懐子くはくはくはくは
 心くはくはくはくは

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

送る後そすくしきも陽のこ
 夢傳のつらうよふまのの
 親父の殿さしは新ハハハハ
 さはハハハハハハハハハハハ
 新風や赤州黄の燈を
 子虎さしハハハハハハハハ
 此力も美徳の何とももの
 海ハハハハハハハハハハハハ
 番掛ハハハハハハハハハハハ
 四里の海ハハハハハハハハハ
 又殿をハハハハハハハハハハ
 松のふらうす下帯もハハハ

風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風

まさかゆり一浪お波のよ安貝
 灘は地底の根の家の底
 破小舟削去けけきききき
 本城子ハハハハハハハハハハ
 手まやハハハハハハハハハハ
 かハハハハハハハハハハハハ
 味増すハハハハハハハハハハ
 三子セハハハハハハハハハハ
 つハハハハハハハハハハハハ
 舟ハハハハハハハハハハハハ
 舟くハハハハハハハハハハハ
 寺の里橋ハハハハハハハハハ

風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風

三
 岸水や流さく胸を流さく
 羽筆と終ハ風を流さく
 直らふふふふふふ竹の波
 夕白く流れく袖を流さく
 小徳利のあふと流さく
 いろくふぬ松を流さく
 下ふふふふふふふの雷
 幹水の桶おろす
 上方のあふ流さく
 流さく
 孫や二度うく
 若く山を流さく

風 風 風 風 風 風 風 風 風 風

三
 一 岸水や流さく胸を流さく
 羽筆と終ハ風を流さく
 直らふふふふふふ竹の波
 夕白く流れく袖を流さく
 小徳利のあふと流さく
 いろくふぬ松を流さく
 下ふふふふふふふの雷
 幹水の桶おろす
 上方のあふ流さく
 流さく
 孫や二度うく
 若く山を流さく

風 風 風 風 風 風 風 風 風 風

あはるるに新干の花はし
 ちやらのくくく山早の春
 冬

次額 天和元年酉

表題

晋伯倫傳酒德頌樂天絶
 酒功讚青追之續信德七百

五十韻

二百五十句

三 又うさねのまももゆにく
 酒のゆし離子解去く強そく
 柳青

宣 句 以テ 莊 子ラ 可レ 見ツ 矣
 豫 骨 の カ 泣 く べ 累 オリ 仁
 志 々 々 々 々 仁 女 根 々 々 々
 暑 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 焚 心 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 傲 向 肉 々 々 々 々 々 木 官 々 々
 聚 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 伎 寸 々 々 画 眉 々 々 々 々 々 々 々 々
 恙 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 本 々 々 々 々 々 食 々 々 々 々 々 々 々 々
 先 胆 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 妙 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

其角 才磨 楊水 角 水 角 角 角 角 角 角 角 角 角 角

女三やうしん一からり引可け
 或二女一又三ま二つ一る三を二あ一れ三る二
 女ハふく子るやふくしのむ
 さハりく後のひつくる恨く
 くらハね猫の月を背けら
 家子霜の具易別易志
 乳子の穀の留の葛の葉
 去秋を花く食よれいふふふ
 白魚をかくくく餅春の宴
 實吾女ハね人似他命をめら
 徒士提灯を枕して休む
 くはまつる女舟のある文を

青 鹿 水 青 角 水 鹿 角 青 鹿 水 青

血摺女霜を和や忍あらん
 了れ末しむらく越くなくく
 因樹の心をのくくハしむ
名天帝子目安を書きわらけり
 桂を振つる早寝もくりゆ
 市の旗子風のかますまいやくらふ
 秋子對しる不帯事の代
 白き親仁紅紫村子送らね塔
 漁の火新鐘を射つる
 師魚の諫め鰻ハ胸を割きらる
 安房の岬に法人を送る
 向後をりはらけり

角 鹿 水 青 角 水 鹿 角 青 鹿 水 青

柏杞子初青其魂鳥の魄
 悉人其秋子似るかりる水
 而るるるるる風り委
 夕暮る息り情るを吐けり心
 民屋所りる腹をせり出り
 吸心の木熱り字に地ハ味く
 まるるあわくく出波の古是
 月尺きむ言解るる向晴りて
 あるれと文を和るる程るる
 従軍り小袖る何るるの心ぬ
 物取おるるるるるるわわるる
 花子思^{カハラ}神宮に寺持るる
 青 彦 水 青 角 水 廣 角 青 廣 水 青

幣るる柔作る託のる
 角

同

原るる^{カハラ}文をるるるる
 春^{カハラ}るるる^{カハラ}るるるる
 下りり^{カハラ}るるるるるる
 月を来りるるる鳥帽るるる
 毎り陶るるるるるるる
 秋月るるるるるるるるる
 以や一山流るるるるるる
 夕之由るるるるるるる
 夜^{カハラ}監^{カハラ}松^{カハラ}風^{カハラ}の^{カハラ}るるるる
 才廣
 楊水
 桃青
 廣
 角
 青
 水

四一五

初の関子すけて敵を討てしる
高基子 柴枝 枝折戸
と心か仁上事より考を考ふて
かきんくそを考ふて起し
宿き戸使くかを憶子招涼温む
所しーハ川く帳の残宝
女の氣胸ふしーしー法漢く
若ふ高事しーくやつ道酒
ストト系入者しーくハ心か
取砂くしー粒考つふしーく月
秋の末のうらさささささささ
藤の院は沙陵をーとふ

角 磨 水 青 角 水 磨 角 水 磨 角 水 磨 角

鬼の命人ハ花子 花子め
子^二丑の春を 實子 砂川け
^二渾沌 翠子 系く 考く 遊子
新 咲しーく 玉了 麻く の山
心か 女房 上 終のく 河のく
すー系 果を ぬき みる みる
構軍 剪 力川 討き すとす
法 小 向 ぬけ け 梅 子 弦 心
宿 小 力 考 考 酒 ぬ 玉 考 考
磨 河 歩 考 考 國 子 生 考
考 考 考 考 考 考 考 考 考
考 考 考 考 考 考 考 考 考

磨 角 水 磨 角 水 磨 角 水 磨 角 水 磨 角 水 磨 角

木の倉とわしく宿受りてはハ
垣引のききく耳の縁立
身の秋いふえ之は且みそ
家子志くむ妹の首髪
子のしきく積子息の縁立
縁と函中は無宿る位
小納りす木枕に布ききりて
納戸の神も有し糸の
煤掃之禮用於鯨之脯
庭心の菊園原うり入
風いしく牛走りわらうらに
蒼石子うり枯柴をたぐ

角 磨 水 青 角 水 磨 角 水 青 角 磨 水 磨

棟と白骨の強聚けしむさ
弓利新造もよむ長し
猿小伝豆鼓う月の結を割心
雷を鳴く芭蕉うり風
花のまの節千羊を直きうこ
機子子射をつりうりて
三
お市もい息もハ吉寺のきき掃
箕もい息も直く在りかん
右うり此かうりの枝もき干セル
山彦踏を抱くうり
忍心ゆり人ハ地蔵うりゆこし
木樨のまぬりて木爪の唇

磨 角 青 水 磨 角 水 磨 角 水 磨 角 水 磨

洞窟に鬼灯の燈籠懸し
 踊り狂ふ此種より川原
 酒の月歩伽坊主の夕榮子
 古葉多うしやる泉の泉水
 河骨死骸ははれ毒を吐やつ
 けあらしう多うし地火と化
 築地河の根の底に身を引く
 天火の闇の金けり。号
 三
 坂江の磯ホ岸ホハ走く浪
 青海苔くくしい海苔を
 花の邊に芝子歌詠を賞し
 月子秋とみ春金の作
 角 水 青 角 水 青 角 水 青 角 水 青 角 水 青 角

さうさ波蕪まよふ干す豆徳
 夕うほやもく負はひしけり
 柳の木子燈籠しうおの箱之
 枕の信より毒薬あくむ
 管の力を何と和魚さく魚
 糸一可休をひききくあふ
 出つゝも跳擧りてハ念母屋
 泥坊溜り雨の火青し
 字のねく下葉う系うさう
 名 秋の里に足取しハ溜
 配取人芦の小忌布を干し
 河うあはれ菌幸地を枕と
 角 水 青 角 水 青 角 水 青 角 水 青 角 水 青 角

心流やむ鯛子針さき生小舟
中流より尾力流を山志
素早く村莊の史くも豊く
勅使草原の御所草子
新を雨神の多を運く
なやきのあれはきりさき
津のふれ生田の森の初月取
そさかしくけり乞食場す
寺のいこまゆり里北織配り
寺の納豆の煮り所
よまこのねみや梅花の甲の光を信
忠炭あきこく小神の御し

角 水 磨 角 水 磨 水 角 水 磨 角 水 磨 角 水 磨

膳もそは小櫛の信あり新くハ
花みりくはけり牛迹
竹の戸を人まの女うお梅を
おそ強りくまこくよ
信のみすあんしと
おとをそくまらあは埋木
多あ信ひく寸就花子の信
如泉は沙りまき力
角 水 磨 角 水 磨 角 水 磨 角 水 磨

同

寺ありま泉まハ秋の神舟
海もく力ま梅花を

楊水

才磨

河津橋も花子ハ菊子ト申船
 船さひすう生海流漸く
 雪の空みきりれの空しくあまのハ
 蕨菜の青子題を設る
 赤やつこかられさ体林と呼
 袴くろ羽衣をもてあはし
 袴きや中尉のせびく位付を
 急所あれし中子付子
 ち文三粒の戸敷をこら敷す
 枯ゆく扇子あ子ら心不
 髪結の位をいぬハ蓮一
 卒初渡の男ゆりし海をる

角 青 水 度 角 青 水 度 角 青 水 度 角 青 水 度 角 青 水 度

骨刀かきしけ路のまらきし
 瘦くしすの乳子頼つ
 肉子ちゆてもうらハきのハ霧
 米く音付耳うあけき
 さしもかびく美子おき秋もそ
 早稲屋士くお子のふ月
 字耕す草穂の生手器つけ
 蕨菜のあれ子れ海む
 后者の蕨入車やし種
 新しや上げゆらぬのさ
 院中つち控了ねの雪踏の忍ぶ
 提灯きつる雲のうけろ心

角 青 水 度 角 青 水 度 角 青 水 度 角 青 水 度 角 青 水 度 角 青 水 度

風おの角内くあを怪りく
 入の虫あみ根子ーのり
 雷の谷丁くー言文子
 言く又言ー我段の玉
 俗のしふ麻島の海は夜あしや
 節のりは東市野赤 塚
 何を受く 吟の物く官尺く
 ひそのくーと雨義をとも体
 力を草月又草の葉は片新端
 梨うーあてき子干ーる
 雲籠の羽のいの敷ひーと
 れ返起く第ー言ぬぬ

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

谷うぶく人ハ志のひくふくま
 穂をくまーだくけの 木
 古家の位あり 剛子くーあ程ハ
 いーちのほくく 風のりく子体
 麻の葉子生く小針を折きく
 あく枝さすまの生ぬ袖子
 きくれく了後味くすむ力子
 ゆく霜葉をくけ後ま 雲
 屋宇の食くくけに夕言の
 人死を待くくけをのあー
 石か曰るのめくくくくく
 木ありくまー風をあ 柳

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

三
 飛雨甚ノ如ハ露ニカレキツ
 強クノ進ニサル新キラクレ
 大根の夢越の関のこまこま
 雪のかけ鮭子久付こやう
 おとらくわ火桶の姫の顔
 るるこい一床子藤巻引つ
 五やくしお入るこまこまにこま
 通る首の泣子泣子泣子
 中よひしれ根のよめめけ塚
 横をふり今何れし一そく
 こよいあり村風とや之味隙を
 優しやくしき涙とほすこ

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

三
 秋の夜後切多きこまこまハ
 任持ゆきしりゆき柴井戸
 三
 葉しらくるも物も移し手
 海老あらししし海苔の煮衣
 急崎の松、娘は花の基
 葉く喜子、秋の雪の雨神
 ト向し海苔の葉は走し
 地の子を立し子に故
 毎夜を空居る仮り残帳
 清きよの目 麦 穂
 川も糸は味方の誓ふこま
 志尼歌は叙り

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

五十五

五十二

初雪のちり花見のきりり
萩ハ碎ハく醱酔ハ入ル
角

同 舞舞
揚水

附贅^イハ^ガハ^ノマ^キニ^スマ^シク^シ曰ク
名用の枝をまきまきハ茶
夜ハ鳥ハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノ
才丸 其角

天和ニ壬戌春
瑞々^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク^ク
山子丸
康城
春

風水也三陰の地をやくけ
雨双立ハ^ノ雷^ノを^ハわ^ハす^ハ
宵^ノつ^ハつ^ハ蓋^ノの^ハ陳^ノを^ハ退^ハく^ハけ^ハ
せん^ハハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノ
左方^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノ
梓^ノ桐^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノ
孤村^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノ
燐^ノ酒^ノ旗^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノハ^ノ
小海志^ノ瓜^ノ白^ノ母^ノを^ハま^ハく^ハ
ト尺 暁雲 甘角 芭蕉 東望 似春 昨雪 言水 執筆 謝 尺子

情を流しの聲をもよおし
於瓶の精を以てくたし
の柳坊卒おぼを言の字
ハ赤の肉を筆を揮く
味香粉をくたしおぼの戸ハ
泣くおのくく女
島をたは花訓の元入
於杖を地をきくく
^二功片の形をきくく飛
飛鳥をくたし佛界を飛
峯の代ハ隅の所と幾ハ
新の物字く五かき一樓

暁 壺 角 之 昨 似 子 樹 曉 角 並

赤流く海隅の古瓜を獨りし
故の赤く血を少くおぼ
おぼ解議の備く松を
槐のうくくくくくく
自落つ赤く海を實とく
強き喜おぼをひめく
風文破く夫つらるる
澄の穂を解おぼのけ
赤の玉を流中く帯て又月
猶くくくくくく
おぼの屋をくくくく
赤の更をくくくく

壺 空 尺 似 並 肥 子 樹 曉 壺 空 並

此の舟伊勢の舟尾張の
波の白浪ききみも又相
替替子一替えをりて
と青手志志の夢も夢
柳の枝子少きなり
危船着擬りかたれり
いゝぬ後長き夏か
夢ささるる院子
かろみのかた持田
此れ鯛も花も
皆原のみ葉

角定 夢 魚 子 尺 吹 角 曉 雲 附 似

五十六

三
七事の月の三事の舟
をものろひ子と杖つく
山を好まき羽めけ子
節の節名りり
入玉の流るの洞
を新しき不二の株上
松葉の祖父きよ
味多き霊の密柑 秋スル
成ト子火の能生
松小刀此吼ぬけり
寺の古や世の朽
かすすの云堤

角 定 夢 魚 子 尺 吹 角 曉 雲 附 似

五十六

消ゆる子棚の幕の夕夕のけ
火張のけの一二寸ほど
何もの端め於ゆる花のけ
に戸すも上沖ふすの意

目

多量のきりきり音を張るる心
美子ぬく一階御心
落の紫千酒儀竹は右衛門
弦もふ弦巻よとくつさるる
面はふ張の張なるる
さるる二十八針きん

せき

廉樹
一品

きささしや或名物修り
後家師美雨の翠簾の正かられ
かろくも松のけり名背の里
文ろくもこの手門たくとおと
初る雪法師を實する人あん
一燈の粥干江の焼屋舟
不煮る物しとる肥子
号風弦元倫乃
クワ子ノ精をさるる有廻
殊萩末也もろくも茶葉
花師をも橋の端をさるる
甚尾の風は紙とさるる

陽方の具殿屋代の日の大工
 蟻の巣の百手よ 栗
 土師のくまは若の袖を引
 様りの坂は清の湯の丸
 無手家の甲を初手のけ屋
 餅をおひする大寺の 傍
 長史ふる乞食ハ家の栄竹
 子布をふとく牛菜の葉
 崩よ 頼ハ又多れ堀をう
 古佛の殿子坂をく月
 名をくまは若の袖めれた
 伴白雪の后こう ころ

らきり雪牡丹ハ屋の初火子
 白袋袖躍りや若葉 花
 赤紙免了乙解さう雨降れ
 夕影長若且あゆらん
 丸の好殿子若葉を株
 序さくまは若の文格

同
 柳針垣穂十木瓜も若葉うれ
 笠おきしりや若の葉あつち
 花はつる雪子梅を掛らん
 市子小室を若の 月
 一晶
 芭蕉
 樹
 栗樹

十一年の三平季を志の九十九
室のそら子念佛 七をく
蓮生を火を消れ末をうら
宿敵をこそ 盡しり 終 終
高き此岸おし 海を實を了
松子 葉をともす 梅 梅の子代
伽藍の穴を花の浮粒人
了 跡 了 被 おく 了 喜 此

晶 樹 魚 晶 樹 魚 晶

了和之屋亥年

花をくくく 五季 海をくく 食をく
所をくく 書をく 陽片の 瘦

芭蕉

一品

朝陽 了 書 海 文 を 味 了 了 ん
寺 子 孫 を 子 折 じ 意 梅
月 を 湯 子 け の 舞 を 芦 可 了 了
眼 の さ け け 子 多 家 の 弱 氣
賢 電 流 小 舟 子 朝 此 舟 船 子
朝 子 意 海 子 を 子 子 子 子 子
浪 人 の 意 子 子 を 結 了 也 百
や 子 の 一 粒 子 入 子 子 子 子 子
子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

晶 雪 貝 角 晶 景 景 晶 晶 晶 晶 晶

其情の流を替へて代より
 雨織り角と可くは風流極
 何れかの松をわく字の月
 破道 信ッく侍の上を次
 二 解了 西瓜を踏くを
 つくまぬの松海片 横
 欠つた尺の楊屋くり置底
 吾ハ私にささうらき成のむ
 松入ぬ穀ハ六十の荆うら
 海所より故すうく表を東し
 人の情を積長の宵の曇子延く
 松入くひまふまの何れをわ

晶 角 景 電 晶 魚 景 角 晶

きこふや陣中を似るひさく
 小野子 飢る餅を食る
 登舟の舟の伯夷は是後よ
 木城ハ武士の横 中
 尺くしき 巻書を焼や柴松
 多心さんやと胸のた月山
 焼の霜を毎子受されく
 路より 巻心あすすんく
 名子 栖屋山の列をく
 梅子すねく 瀑布を酒飲

角 景 電 晶 魚 景 角 晶

同

枯葉髪茶螺の角をさきおん
 魔神を使つて荒海のまを
 鐵の弓取たけきやうやよ
 虎 懐く 始つてあつき
 空く 四膳の床を吹あじ
 押火溜る指のまもー火
 下月后糸をねる月を穿
 西瓜を綾子つておあひく
 名いの上字株形のぼく吹鳴る
 みられくの東ーくぬ石 向
 武士の糧の丸箱 枕 石
 八巻の釣糸をさき 出 了

角 是 角 是 角 是 角 是 角 是 角 是 角 是

付あきんく花を食ふ酒徒外
 春一湖 日暮テ 鴛 無 吟
 角 是

同

一季二百六十日
 一海口の吹雪三日
 籠や々事やし 向け暮き
 去る去る浪子大根く舟
 月をさき 舟の海へや枯つらん
 くららき 去る 暮をよみあふる
 百もさき 狐と秋をさき 去らん
 傾婦を葉の露くくく

角 是 角 是 角 是 角 是 角 是 角 是 角 是

李下

敵河の海の色をさす月軒
 然ハ了下一音の敵
 又音れ金持ハ音をまつて
 みんとく) 船くつら善子
 其は志のいほとしかびんき
 士峰のやをさすか賀殿
 松百く玉子皮の後こく
 名くくらかさし黒木津柳
 終其名の花欠く男内ゆり
 喜一音果とく河心のおお
 月を中し生憎のくれ上戸也
 是く志くくむがく新海

角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角 下

新うけりそ音小種を植るん
 院のほ家のゆりもあふ右
 却をよ音系山竹を思ひわる
 仕阻をくくもく八音のくく又
 善海子女房中くを新む如
 音みしれかもし地とあく音
 満よる猿骨何を女情
 風そよく切氣燈の記
 破くく小吟系ハ秋のむり
 こぬ音の梅子時を嫌む
 名月のあハ海子くくつ
 金持行子 柏のみを物も

角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角 下

柴生をいふを女狩ぬ奴にさきん
すり我にさる学事其れおれ
寸法沙地の衣は片一うたふ
昔も力む率都の儀大小
侍の多門を足をもよぎのや
凡丈三百人のさきうたふ
角下 芭蕉 角下

寛文十戌年

果と信とさきれ之肌をゆくと衣
夏走り可居りゆり玉民
かけ作り河系ねまに足渡り
宗房 正教 宗房

助勝

同
披ハ家の玉衣方刀の一葉切
と糸の糸の服一つまふ秋風
冷しき石はさきうら虎子似
宗房 定就 宗房

長忠

同七未年 一日附

肩の急物うらものつらうに新お
とをたけけと河川おりの家
好生 好の心とみさうに心
志和の繪河をさきうのつと刀
宗房 宗房 宗房

鴉々 二輪をりてお定さつてしれ
おてをりてしるうらうら海をかん
あ

延喜元戊午

大抵屑の物ももに不二の物
故にさしれ舟田子の海女の
配書

虫の聲白雲とてくはあつたれ
瓜の中ごの空巻りて
あ

孔子ハ鯉魚のさしみるはこれ
お起する巻去の垣手力更て
あ

既経其居るくくし
あ

物るあも鬼の甜食の生 春
あ

珠橋より大道熱の若を交る
仁義若の落り 権をもあやる
あ

指欄のありてさうや出え
大字の抄を不若のあて抄
あ

六十一

確のくくく集のや入ぬらん
大津の良辰と暮らむの湯村

或るくくく引くくくくくく
敵くくくくくくくくくく

桶のくくく物のくくくくくく
それ人くくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく
唐細歩のくくくくくく

くくくくくくくくくくくく
中くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく
柳布をくくくくくく

砂のくくくくくくくくく
此界をくくくくくく

お坊くくくくくくくく
物鏡くくくくくくくく

上ハ船さし中ハ竹 障
夏申ハ此子ねハの程さる

心ハかまふ長持のしり
送る指是のしり海さる

息の持をきき海手流り花
女院 流り九ニ位ハ尾鯛

大庭の退展くすお茶する
味塩焼のさつつき稲葉山

亭ふくくくくくくくくく
子のさく小櫃ゆき玉のさる

子響子しぬりのちり流すこ
芳の香のうらり新カをさる

跡りさるゆきさるゆきさる
見も又さるさるく徳安夷ぬ入姓

白菊見さるゆき伊流の年
若花もく木枕ゆきかさる

さきさきの松海より五印系河
を舟舟のりて居る。京橋

丁卯年中

伴賀師集物

青府

栗原志山翁余尉、秋より河
自礼飾りたる松の松
師寺庵より食ひ飯をゆりてん

一品

桃青

天和四甲子

李の

昔は此の寺の自りて松の松
自と松葉を海の水を食

芭蕉

枯枝子松のりて秋のり
漱うけけゆりて方好を里

芭蕉

其の

